医学における倫理

鈴木　聰男

人生においては、健康、疾病、死、いずれも避けては通れない問題である。最近、特に話題となっている、尊厳死、脳死、臓器移植、人工授精、そして必ず入り込んでくる問題として医療不信がある。これらの問題が自分や家族の身の上に起きてきたとき、これを認めるか否か、一体どのように対処したらよいのか、考えてみたい。

まず、例えば尊厳死を認めるのかどうか、について考えてみると、これは単に医学、科学だけで解決できる問題ではない。脳死を認めるかどうかにしても、いわゆる学術経験者の提言をそのまま受け入れてよいのかどうか、不安が残る。その原因の一つは、自分が決定権をもっていないこと、いいかえれば自分で決定することになれていないためである。命、病気、死、いずれに対してもあまりにも「あなた任せ」の習慣に浸りすぎてはいないだろうか。何も医学の情報を十分に持っているべきであるというわけではない。日頃、日常生活のなかで、人間とは何か、人生の意義とは、肉体と死、魂とは、死後の世界は‥‥これらについて自分で考え、宗教を学び、教典を読み、瞑想し、真剣に考えて、自分なりの判断を下せる「訓練」をしておくべきである。「訓練」をしておくと書いたのは、共通の哲学を持った人々からなる共同体のなかでの訓練が必要であるという意味である。その共同体のなかでの出来事として、一人一人が考え、協議し、決定していく過程を数多く経験することが必要である。共同体の構成員数は必ずしも大きくなければならないというものでもない。数十人いれば、その中には一般の会社員もいれば、教師、自由業、医者、そして主婦、学生、老人、外国人、などが含まれるであろう。その中で、さきに述べたような共通の哲学、あるいは信仰をもった人々が自分達の問題として協議し、決定し、そして実戦していく、これが大切である。詳しく書けばきりがないので、要点を箇条書きにしてみる。

医学のなかでの種々の問題に関する倫理を含めた考え方

1．問題点－尊厳死、臓器移植その他の問題も、自己決定意識が不足し、しかも医療不信が根強くある。

2．問題解決のための分析－医学、科学だけでは解決できない。
　　－自分で決定する習慣を養う。
　　－医者と患者、当事者と家族、などが協議できる共通の場が必要。

3．解決への道、提言－日常生活のなかで、哲学、宗教、信仰が常に思考の基盤となっているようにする。
　　－自己決定の訓練、自律性の確立。
　　－共通の哲学、信仰に裏打ちされた共同体での活動。

自分について、例えば尊厳死について決めなければならない場合、どうするか具体的に書き出してみると、次のようになる。自分は、バハイ共同体の中の一員として、これまで常に生と死、死後の生、この世と次の世、魂と肉体、葬儀の意義、などについて協議し、実際に自分も死に立ち会い、葬儀を行い、一人の人間が生から死、そしてさらにそこから先の世までの移り変わりを体験してきており、自分なりに結論が出せるし、遺書も書くことができ、さらには家族も同じ共同体であるので、自分の決定を尊重してもらえる。また、バハイの教典には、魂と肉体の問題、人間にとって最も大切なのは魂なのか、肉体なのか、魂はどの段階で肉体に宿るのか、魂は肉体を離れたらどのようになるのか、などについて数えきれないほどの、参考になる文章が残されている。したがってこれらの助けにより自律性をもって自分で決定することができる。臓器移植などについても、自分で決定できない場合は、幸いにも同じバハイの共同体に複数の信頼できるバハイの医師がいるから、相談でき、しかも、もし二人以上の医師のアドバイスが同じであれば、何の躊躇もなく自分で決定できる。

以上、医学をとりまく種々の問題の解決には、ただ医学的、社会的、あるいは法的な解釈だけでは不十分であり、自律性をもった個人が、共通の信仰をもった共同体のなかで活動し、その中から結論を引き出さない限り、いくら議論を繰り返しても万人を納得させる結論は得られない。